熊本学園大学 外国語学部 第20号
英米学科 GAZETTE

令和3年3月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

訳語「グータッチ」雑感

神本　忠光(教授／応用言語学・英語教育学)

時の流れで、ことばも浮き沈みする。コロナ禍で"fist　bump"がスポーツ界から躍進した。握手やハグの代わりに、海外TVニュースで政治家らも使っているのをよく見かける。日本にはお辞儀があるので民間での普及率は低いが、「グータッチ」の訳がある。

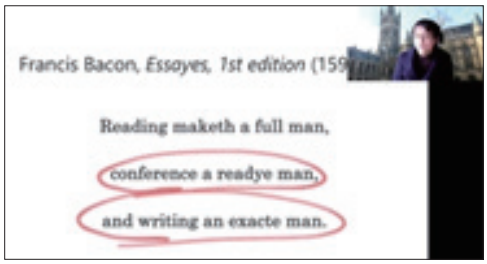
どのようにしてこの訳語が誕生したのだろうか。出自が英語だからといって、浸透していないカタカナ語「フィスト」と「バンプ」ではわかりにくい。"fist"をジャンケンの「グー」と見立てたのが妙味である。視覚的に同等だし、原語1音節の勢いも維持できる。後半の"bump"は車の部品「バンパー」から逆形成された単語だが、耳慣れない。意味合いは異なるが卑近な「タッチ」の出番となり、「グータッチ」の完成となったのであろう。しかし、願わくば短命であれ、とアマビエに祈る。

遠隔授業奮闘記

矢冨　弘(講師／英語史・社会言語学)

2020年度の春から新型コロナウィルスの影響で大学での対面式授業の実施が難しくなり、遠隔授業を実施する必要に迫られた。このような状況下でも学生が最大限の学習効果を得られるように授業方法を熟考し準備した。授業はZoomを用いたリアムタイム双方向の授業を中心として組み立てた。英文法や英語史の授業では、学生にオンデマンドの講義動画（写真左）を視聴し練習問題を解いてきてもらい、Zoom授業で答え合わせや補足、質問への対応などをした。英米文学講読ではZoomのブレイクアウトルーム機能を利用してグループディスカッションを行うこともできた。

社会状況を観察して私が確信したのは、ウィルスの感染拡大が収まろうと今後は学生も教員もZoomなどの遠隔コミュニケーションツールを使いこなす必要があるということである。もちろん対面式の授業が行えないことは残念ではあるが、このような状況下でも学べることは多い。遠隔授業の可能性が浮上したタイミングで、遠隔授業に十分対応できるように機材を調達し、Zoomや動画作成、クラウド型授業支援サービスmanabaの活用方法について勉強を始めた（写真中央）。この時点での集中的な勉強がその後の授業運営に大きく役立った。Zoomで学生とコミュニケーションを取りつつ、iPad上のスライドを提示しながら効率的に説明することもできるようになった（写真右）。遠隔授業への対応で得た知見は、今後の対面式授業でも有効に活用することができる。今後はさらに授業の幅を広げ学生の満足度を上げるとともに、どのような状況であっても学び続けるという一学徒としての姿勢を見せていきたい。



研究紹介

伊藤　友子（教授／外国語学部）

私の研究の専門分野は、「教育社会学」です。一般的には、あまりなじみのない分野かもしれませんが、「教育現象」に対し「社会学」の方法論を用い分析する手法をとる学問です。

私の場合は、その「教育社会学」のなかでも、主に教職課程の分野である「教師観の成立や発展」について「教育社会学」的に分析をする研究と、「高等教育」について「歴史社会学」的に分析をする研究を続けています。ただ、両者ともに「高等教育」という大きな括りで論じることが可能であり、私の研究志向も、その枠のなかで発展してきました。

具体的には、もともと地域社会のなかでの「大学」の存在に興味関心があったことから、自然と「大学」について教育社会学的に解明し、「大学（高等教育機関）」がどのように機能し、かつ役割を果たしているのかを明らかにしたいという視点から、私の研究者生活は出発しました。その後、より地域社会に密接にかかわっている「高等教育」の歴史社会学的な分析に移っています。その方向性のなかで、「大学」の「教職課程教員」として、「教職」について、その役割や機能を分析・考察することに研究上の興味・関心を持っています。特に、「教師」を養成すべく「教職課程教員」として、学生が目指す「教師像」が、どのように成立・発展してきたかを「歴史社会学」的に分析を進めたい、また、「教師」が置かれている現在の状況を踏まえて、その「教師観」のどこに問題があるのか等にも研究上の興味・関心を持っています。

要するに、私は、「教育」を「理念や理想」から語るのではなく、あくまでも「現実の問題」から出発し、その問題を少しでも解明することに、自身の研究上の意義があると考えていますが、現在は、それを追及している過程の、険しい道の途上にあるとも言えます。ただ、その道は、厳しいけれども同時に楽しい道でもあります。

明るい兆し

岡村　一（教授・スペイン文学）

パソコンが普及だしたのは90年代の終わりごろだったろうか。私は1953年生まれ。今では、昔はパソコンなしでどうやって仕事をしていたのかと思うほどだが、たぶんはじめからなければないで不便とも感じずにやっているのだろう。というわけで、今の１年生の案外な明るさは、通常のカレッジライフを体験していないせいかもしれない。だがいかにも気の毒だ。入学式、サークル勧誘など新年度のわくわくする行事は軒並み中止。授業は基本遠隔。登学しても施設は本来のようには使えない。学園祭も遠隔。なんとも味気ない。が、幸いコロナ禍は終息傾向。入学式も挙行予定。語学の授業は最初から対面式の見通し。秋学期以降となると多くが本来の姿に戻るにちがいない。留学や海外研修も徐々に可能になっていくだろう。ちなみに英米学科では毎年４月に新入生のため１泊２日のフレッシュマンキャンプを実施して互いの親睦を図ってもらい、かつ留学経験者の上級生、英語教員や卒業生などの助言を聞いてもらっているが、今回はZoomを使って同様の機会を設けることにしている。

英文と生徒と ―教育実習を終えて―

英米学科４年　北原　佳奈

令和2年秋学期に、熊本学園大学付属高等学校で教育実習を経験しました。初日、緊張しながら担当クラスの教室へ入りましたが、生徒の皆がすぐに温かく迎えてくれ、これから始まる実習に心を弾ませました。最初の1週間は多くの先生方の授業を見学させて頂き、授業の技やコツを吸収しました。2週目から実際に授業をしてみると、先生方のように思い通りに授業を展開することができず、大勢の生徒を前に立つ緊張から頭が真っ白になってしまうこともありました。そのような中で私が授業実践をやり遂げることができたのは、多くの先生方の温かいご支援や的確なご指摘のおかげです。授業後には必ずフィードバックを頂き、それらを元に授業準備を綿密に行うようにしました。授業では常に落ち着いて、「英文」と「生徒」と向き合うことに集中しました。その結果、研究授業では納得のいく授業をすることができ、自分自身の達成感と成長を感じることができました。実習期間は私にとって毎日が新鮮で刺激的な時間でした。特に今年は新型コロナウイルスの流行により実習の受け入れも大変な中で実施して頂き、実習校の皆様には心から感謝しています。この実習で学んだことを糧にこれからの人生を歩んでいきます。

編集後記

▲韓国の大学とのZoomによる日本語教育実習

▲留学生クラスでの日本語教育実習

長引くコロナ禍の影響で特に国際交流関係のプログラムは多様な変更を行い対応しています。日本語教育の海外実習は例年NZ、韓国、台湾で行いますが、今年は韓国の大学とZoomで実習を行いました。pptの準備や動画の活用等、新たな授業形態に実習も対応しています。

きみと未来をつなげる
クマガク

編集人　塩入　すみ（英米学科長）
〒862-8680　熊本市中央区大江 2-5-1
TEL: 096-364-5161
（代表）　Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp